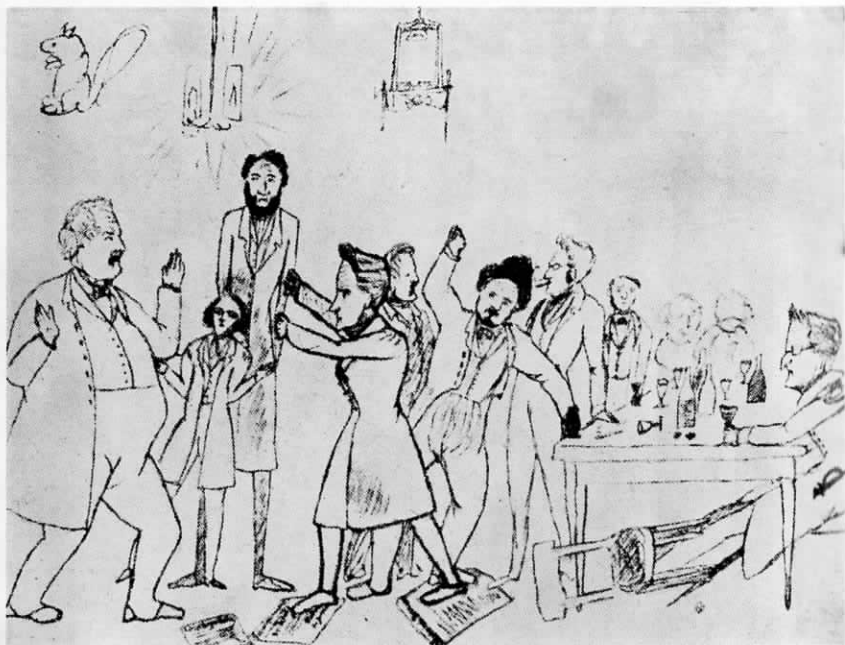




マックス・シュティルナー

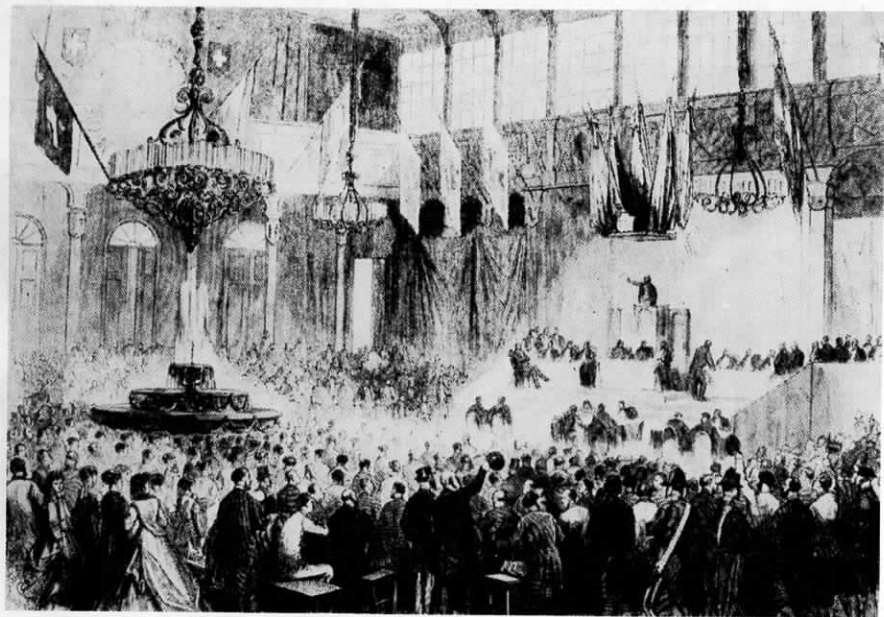
(いずれもエンゲルスがかいた漫画)



ベルリンの自由人とアーノルド・ルーゲとの出会い(1842年11月10日)  
(左から)ルーゲ、プール、ナウヴェルク、ブルーノ・パウアー、ヴィガント、  
エドガー・パウアー、シュティルナー、マイヤー、二人おいてケッペン



ミハイル・バクーニン

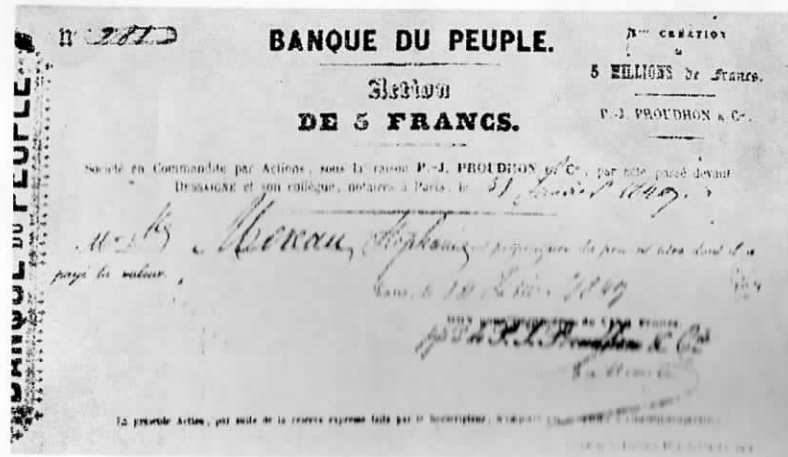


第1回平和・自由同盟大会(1867年、ジュネーヴ) バクーニンの演説は大きな感銘を与えた

P=J. プルードン



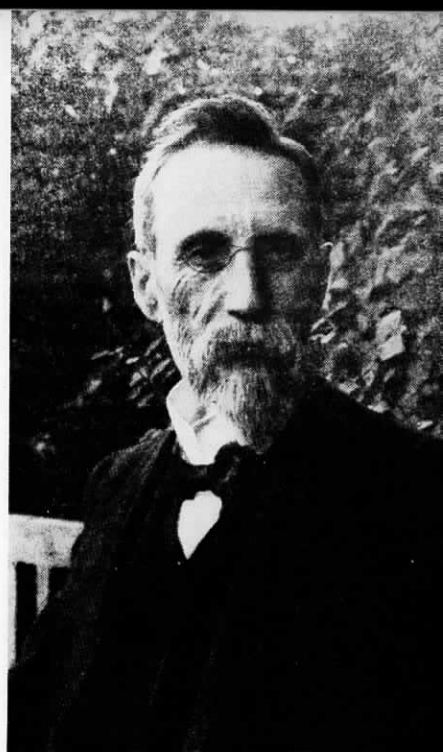
ドーミエのかいたプルードン



プルードンが創立した人民銀行の5フラン株券



ピョートル・クロボトキン



ジャム・ギョーム(1913年)



クロボトキンが積極的に協力した『叛逆者』紙の編集室

●先駆者 マックス・シュティルナー 1806-1896 15

E・アルマンによるマックス・シュティルナー17

わが教育の誤れる原理 21

唯一者とその所有 25

国家とよばれるもの 25 個人の自由と社会 26 党派 29 叛逆と革命 32

反批判 33

シュティルナーのエゴイズムとは何か? 33 モーゼス・ヘスト二種のエゴイストの結社 35

フォイエルバッハの抽象的「人間」 36

●P = J・ブルードン 1809-1865 39

若きブルードン・自画像 40 印刷工としてのブルードン 41 公けの生活への門出 44

所有とは盗奪である 46

自由の到来 49

経済的諸矛盾の体系 53

一八四八年革命におけるブルードン 55

乱闘に身を投ずるブルードン 60 押し除けられた候補者、ブルードン 63 ブルードン、候補に選ばれる 64 一八四八年六月労働者蜂起のあとで 64 民衆の選挙宣言 66

権威の原理について 75

統治の偏見 75

絶対権力からアナキーへ 79 法律 82 代議制度 84 普通選挙について 86

政府と民衆 87 権威はもうたくさんだ 88

ブルードンと労働者の立候補 91

選挙日の夜のバリ 93 セーヌ県労働者六十名の宣言 95 候補者は無用だ! 101

「共産主義」に抗して 113

集団の主権 113 「共産主義」悪化した国家主義 114 組合について 114 大衆の独裁なるもの 115 自発性について 115 革命は何びとの事業でもない 116

●ミハイル・バクーニン 1814-1876 119

バクーニンの見た一八四八年二月革命 119 ジャム・ギヨームによるバクーニン 121

私は何者か? 134

神と国家 137

個人・社会・自由 137 自由と自我 137 国家と政府 138

革命的国際結社または同胞団 140

同胞団の綱領 141 革命的教理問答 150 国際主義的連合主義 167 教会と国家 170 国際兄弟の

革命的秘密組織の綱領と目的 176

マルクスとの論争 181

I ハーグの破門 181 II 国家と無政府 186

バクーニンおよびマルクスとバリ・コムイーン 189

バクーニンのバリ・コムイーン観 192 マルクスのバリ・コムイーン観 198

バクーニンと労働者自主管理 201

I 協同組合について 201 II 労働者組合と集团的所有 203

## ●直接行動と絶対自由主義的建設への予想について 207

セザル・ド・パーブとアデマル・シュヴィツゲールとの論争 209

ミクロス・モルナルによるセザル・ド・パーブ 209

将来社会における公益事業の組織について(セザル・ド・パーブによる) 210

労働者生産組合による管理か? 210 国家による管理か? 212 「アンリアルシ国家」 214 共

産主義と「アナキー」 216 ブルジョア国家と労働者国家 217

インターナショナルの前での公益事業の問題 219

アデマル・シュヴィツゲールのセザル・ド・パーブへの回答 219 「労働者国家」は現

存国家に類似する 220 「労働者国家」は解決ではない 220 新しい二つの原理・集産主義と

連合主義 221 国家にとってかわるコミュニケーション連合 223 社会革命の大きな諸潮流 223 コミュ

ニオン連合が勝利するだろう 224

## ●ジヤム・ギヨーム 1844-1916 227

フリッツ・ブルップバッヘルによるジヤム・ギヨーム 227

●社会組織に関する諸理念(ジヤム・ギヨームによる) 232

I 前書き 232 II 農民 233 III 工業労働者 236 IV コミュニオン 237 連合の綱 246

会主義は存立しない 248 一国だけでは社

## ●ピョートル・クロボトキン 1842-1921 251

マックス・ネットラウによるクロボトキン 251

●無政府主義の理念 254

一八八〇年ジュラ連合大会 259

ジュラ連合大会報告 259 クールトラリ労働者連合の、一八八〇年ジュラ大会提出の覚書

(綱領) 264 アナーキーと共産主義 270

リヨン軽罪裁判所における被告アナキストの代表陳述(クロボトキンによる、一八八三年一月十九日) 276

叛逆者の言葉 277

国家の解体 277 中世のコミュニケーションから現代のコミュニケーションへ 278 革命政府 286

アナーキーとその哲学、その理想 297

ロシア革命におけるクロボトキン 299

ゲオルク・ブランデスへの手紙 299 共産主義はどのような方法で招来されてはならない

か 301 ヴィルキンスの最後のクロボトキン訪問 305 エマ・ゴールドマンのクロボトキンの

思い出 306

目次／神もなく主人もなくII

- エツリコ・マラテスタ
- エミール・アンリ
- 組合の中のフランスのアナキスト
- スペインの共同体
- ヴォーリン
- ネストル・マフノー
- クロンシュタット
- 獄中のアナキストたち（一九二一年夏）
- スペイン戦争の中のアナキズム
- ドゥルルティと絶対自由主義戦争
- 政府の中のアナルコ・サンジカリズム

訳者 後記

人名・事項索引

神もなく主人もなく  
アナキズム・アンソロジー I

## 序 文

このアンソロジーは、最初、当時デルフ出版社を主宰していたアンドレとジョルジュのナタフ兄弟の発意に私  
が協力して計画されたのであるが、その後この出版社はなくなつた。今日「マスベロ小叢書」として出る本書  
は、初版を改訂し、簡約にするとともに増補したものであり、それとは著しく異なつたものになっている。歴史  
的・逸話的な要素よりもイデオロギー的側面をふやし、紹介、説明、注釈をより多く配し、要するにより教育的  
になっている。責任はこんどはひとり私にある。

まず最初に、書名をなぜ『神もなく主人もなく』としたか、これをとりあげることがぜひ必要である。

その倦むことを知らぬ博学で著名なモリス・ドマンジェは、一九五七年にあらわした著書『オーギュスト・ブ  
ランキの政治・社会思想』で、ルイ・ルーヴェの『世界アナキズム史』に拠つてこの文句が、十五世紀ドイツの  
格言からとられたものであり、また、モリエール『ドン・ジュアン』の一種の前ぶれであるドヴィリエの一六五  
九年の悲喜劇『ピエールの饗宴または落雷で死んだ無神論者』の第一幕第二場にもとりいれられた、と確言して  
いる。

一八七〇年、皇帝の人民投票のさい、オーギュスト・ブランキの最も若い弟子の一人シュニ博士は、『神は  
もうたぐさんだ、主人はもうたぐさんだ』と題する小冊子を公けにした。

ブランキも、生涯（一八〇五—一八八一年）の晩年の一八八〇年十一月に、ある雑誌を創刊し、それに『神も

なく主人もなく」という名をつけた。

ドマンジエは、この偉大な革命家の死後、さまざまな団体や雑誌がこの文句を勝手に使ったことをつけ加えている。それはパリのラメイ街の民衆館の壁にも出ていた。それはまた当時アナキズム運動の標語となったが、その精神は、ブランキ主義のそれと対立的ではないまでも、非常に異なるものだったのである。

このアンソロジーのあとで見ると(本書二九三ページ)、ビョートル・クロポトキンは、『叛逆者の言葉』(一八八五年)の中で、この標語をこうしたい方で自分のものとした。「他の何びともましてこの陰謀方式の体现者であった人物、この方式への献身を獄中生活で払った人物は、その死の前夜に、彼の全綱領である次の言葉を放った、神もなく、主人もなく！」と

一八九三年十二月九日、アナキストのオーギュスト・ヴァイヤンはフランス下院に爆弾を投じたが、そのあとブルジョア権力はその仕返しに、アナキズム弾圧のいわゆる「極悪行為」取締り法を公布した。この法文審議のさいに報告者のアレクサンドル・フランダンが、フランス下院の高い演壇から叫んだ、「アナキストたちは、神もなく、主人もなく」という標語を実現しようとしている」と。

一八九六年七月、ボルドーのリベルテール(絶対自由主義者)たちは、一つのアッピールを発し、その中で「神もなく、主人もなく！」というリベルテール思想の美しさを称えた。そのご間もなくセバステイアン・フォールは、同じ年の八月八―十四日の『ル・リベルテール』紙上でこう注釈した。「神もなく、主人もなく、というブランキの標語は分割することはできない。そっくりそのまま認めるべきである……」

ドマンジエがさらに語るところによると、一九一四―一九一八年の戦争中にセバステイアン・フォールはこの標語を復活させ、平和回復後、パリに現われたアナキスト青年たちは、一九一九年六月二十五日の『ル・リベルテール』紙が報じたように、「神もなく主人もなく」と自ら名づけた。

この標語は、すでに知るように、初めはアナキストだけのものではなかったのに、彼らのものとなった。これ

が、それをこのアンソロジーの書名とした所以である。

本書は、いわば復権請求のための大部な訴訟記録である。実際、アナキズムは不当にもこうむった不信の犠牲にされているのである。

不正は三つの形で現われている。

まず、中傷者たちはアナキズムは死滅したと主張する。アナキズムは現代の革命的な大試練すなわちロシア革命とスペイン革命に耐えることができなかった。それは、集中化、大規模の政治的・経済的単位、全体主義概念を特質とする現代世界には、もはや占めるべき地位をもたないであろう。アナキストに残されているのは、ウィクトル・セルジュの表現によれば、「事の勢いとして革命的マルクス主義といっしょになる」ことだけであろうという。

つぎに、中傷者たちは、アナキズムへの信用をいっそう失わせようとして、この教説の悪意にみちたヴィジョンを持ちだす。アナキズムは、本質上個人主義的、特殊主義的であり、あらゆる形態の組織に逆らうものである。それが目ざすのは分割、細分であり、管理および生産の小地域単位自体への後退である。それは統一、集中、計画には無能である。それは、「黄金時代」に郷愁をいだき、原始的な形態の社会を復活させようとする。それは子供じみた楽観主義によって過ちを犯し、その「観念論」は物質的の下部構造の堅固な現実を考慮しない。それは矯正しようもなくブチ・ブルジョア的であって、現代のプロレタリア階級運動の圏外にあり、要するに「反動的」であるというのだ。

最後に、ある注釈者たちは、テロリズム、個人的危害、爆弾による宣伝のような逸脱点だけを、忘却の中から引きだして、騒ぎ好きな世間に知らせようとしている。「ボノ団」(シュテイルナー主義者の結社、盗賊行為を行なった)を扱った最近のある映画は、一見アナキズムを魅せ、流行らせようとするかのようでありながら、実はその信用失墜を狙ったもので



ある。

アナキズムが、誹謗、偽造、黙殺等さまざまな形の陰謀を及びせられてきたにもかかわらず、今日、日陰から姿を現わし、その大胆、洞察、予見の有効性が見出されるにつれ、倍加する憎悪と悪意がその上に襲いかかるうとしてゐる。その一例としては、ジャック・デュクロ(フランス共産党政治局員)の第一インターナショナルを扱った一書をあげれば、十分だろう。

著者のいうところを信ずるなら、第一インターナショナルは最初からマルクスの監視つきの狭場であり、彼の反対者たちは侵入者にすぎなかったことになる。デュクロは、しかも「権威主義者」と「絶対自由主義」との間に行なわれた闘争（国家問題に関する）の賭が何であったかを明瞭に説明しなければ、マルクスが反対派に対して行なつた不誠実なやり口をあばくこともせず、どのページでも、バクレーニンを山師、挑発者、極悪非道の分子のごとく扱い、不当な侮辱を加え、ついには資本家に仕える反動的な行動までも彼らに帰しているのである。

彼は、あらゆる真実に背いて、一八七二年のハーグ大会でマルクスとその一味が「第一インターナショナルを」永久に分裂させたその責任を、除名されたバクレーニン派だけに帰し、総務委員会のニューヨーク移転後、マルクスはその部隊をほとんど失ってしまったのに、「反権威主義派」インターナショナルがバクレーニン派の推進のもとにその後も続けた活動については、読者に隠している。

だが同書の末尾の数ページは、この偏見の理由をもらしてしまっている。デュクロは、バクレーニン主義者について書きながら、その実トロツキストを考えている。少々無理な比較を用いて説明するなら、マルクスがバクレーニンの「分裂」と「冒険主義」に対してインターナショナルの統一を擁護しなければならなかったのと同様に、レーニンと各国共産党は、トロツキストの「冒険主義」と戦わなくてはならなかったのである。

デュクロがこうした不正行為を働いたのと同じ時期、すなわちインターナショナル創立百年目に、しかしそれほど野卑ではなく、もっと「学問的な」体裁を帯びた計画で、あらゆる種類のマルクス主義学生——もしくはかく称する者——の群が、国立科学研究センターの一九六四年セミナーのさいにいっしょになって、バクレーニンと今日のバクレーニン専門研究家アルツール・レーニン(目下オランダで刊行中の膨大な「バクレーニン・アルシーヴ」の編者・注釈者)を力一杯殴りつけたのである。

ここに提供する一件書類では、資料自体が語っている。訴訟を再び起こすにあたり、われわれはたんに回顧的に不正の償いをしたり、博識ぶったりはしない。実際、アナキー(すなわち無支配社会)の建設的理念は、それを再検討し選別するならば、現代の社会主義思想が新たな出発をなす助けになるものと思われる。それゆえ本書は、行動の領域と同じく知識の領域においても出色のものである。

ここに集めたテキストには、未刊のもの、発見不能だったもの、あるいは黙殺の陰謀によって世に埋もれていたものもある。選択にあたっては、それがめったに見ることのできないものであるか、あるいはそれが関心をひくものであるかによった。この関心は二重であって、内容の豊かさか、または形式の例外的な見事さか由來している。類似の著作に反して、われわれはリベルテール思想を握りどころとするすべての著作家を洩れなく網羅しようとはしなかった。主だった先達者たちに注意を集中し、第二級とみなされるエビゴーンは無視した。第一巻では、十九世紀アナキズムの三人の開拓者、シュティルナー、ブルードン、バクレーニンを扱うことになる。

1 ホアキン・モオラン『スペインにおける革命と反革命』（一九三三年）における注記。